

自動運転で目的地到着

新移動システム 栗原で実証研究

慶大が今夏から

「コ・モビリティ」で、将来新たな産業の誘致につながるかは」と期待する。

同大が掲げる「コ・モビリティ社会の創生」プロジェクトは、10～15年後をメドに、全球球測位システム（GPS）を使

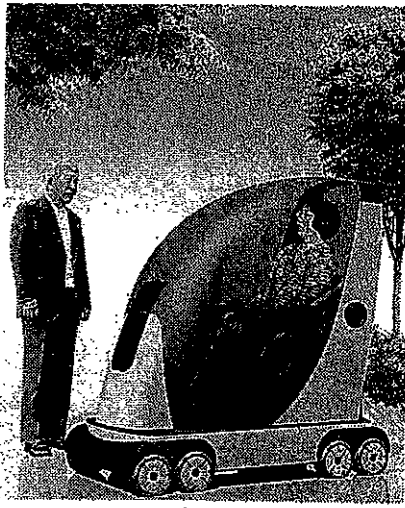
い、自動運転によって利用者が目的地まで到達できるような移動システムなどを開発し、新しい「コミュニティ」の構築を目指す。国の委託業務として1次事業が昨年3月から3年計画で始まった。

今年度は本格的な実証

研究に入ることに成っており、都市モデルとして大都市型の東京都三鷹市、地方都市型の青森市とともに、地方市街地型として栗原市が選ばれた。

栗原市はこの研究に全面協力し、施設内での実験が終われば、実際に街中でも走行実験ができるように特区申請することも視野に入れている。

情報システムと交通移動手段を組み合わせた「コ・モビリティ」という次世代の社会づくりに取り組んでいる慶応大学が、今夏から栗原市鷹沢地区で実証研究を行う。休業中の細倉マインプラザやゴーカート場跡があり、実験に適していると選ばれた。同市の佐藤勇市長は「協力すること



慶応大が研究している電気自動車「イメーシ図（慶応大提供）」